紫式部の意識基体

南波　浩

（一）

周知のように、源氏物語の蛍巻では光源氏の口を借りて、作者紫式部の物語論がのべられている。そこには、今日のわれわれにとっても、あらためて考えてみるべき示唆深いいくつかの提議が含まれている。その中で、

「（物語は）その人のうへとて、ありのままにいひ出づることこそなけれ、よきもあしきも、世に経る人のありさまの、見るにもあかず、聞くにもあまることを、後の世にもいひ伝へさせまほしきふしぶしを、心にこめがたくて、いひおきはじめたるなり」①

という一節がある。その大意は、物語というものは、実在の人物のことをそのままに語るようなことはしないが、善悪いずれにせよ、人間生活のもろもろの現象の中で、感銘深い、看過しがたい素材を、内発的な創作衝動に突きあげられて、語りのこしたものだということである。

これは、作者主体と客観的所与としての素材（自然および人間生活の諸現象）とのかかわり、同時に、作者にとって書かずにはいられないものを書くという、強烈なモティーフの重要性を説いたものである。

「見るにも飽かず、聞くにもあまること」

とは、自然および人間生活の諸現象の中で、人間として感銘感興を覚えるもの、人間として看過しがたい事象をさすもので、素材の質の重視である。また「心にこめがたくて」とは、作者主体とのかかわりにおいて、主体の内面から高揚してくる創作衝動を意味する。

今日の文芸学では、このような、素材とイデーの結合の所産を、モティーフとよんでいるが②、右の蛍巻の一節は、作者主体の内発的なモティーフの高まりを問題としているものとも考えられ、これは文学における今日的な課題でもあろう。

では、その「イデー」とはどのようなものか。また、「素材とイデーの結合」とは、どのようにして形成されるのだろうか。ここでいわれる「イデー」は、古代的、プラトン的な「イデア」や、中世的、神学的な理念としての「イデア」を意味するものではなく、近世的、デカルト的な「人間の意識内容」を意味する。その「イデー」の生成は、人間個体が客観的所与としての素材（外界の事物、人間生活の諸現象）に対応し、その刺戟によって、高度に組織され有機化された物質である大脳の機能が活動し、その活動過程において生成されるものである。[3] イデーは大脳の反射活動の所産であるが、イデーの根源は大脳ではない。大脳は反射活動の器官であり、イデーの根源は外界の諸物・諸事象である。けれどもまた、イデーは単なる外界の諸物・諸事象の反射事象でもない。

反射活動については、低次神経系の活動（単純な被刺戟反応を示す無条件反射活動）と、高次神経系の活動（大脳皮質による、分析と総合との志向をもつ活動）[4] との間には、質的な区別が認められねばならない。この後者の活動こそが「心的活動」とよぶに値するもので、この心的活動による、外界の諸物・諸事象の反映の所産が「イデー」である。

ところで、このような心的活動による外界事物の反映は、外界の事物から、あるいは大脳の反射活動から、それらのいずれかによって、一方通行式に行なわれるものではなく、両者の相互作用によって行なわれるものである。なぜならば、同一の外界の事物からの影響刺戟が、なに人にも同質の影響効果を与え同一の反射作用を及ぼすことはなく、人それぞれに異なった反応を起こすものである。それは、外界の事物が、その刺戟を受けとる人間個体の「内的諸条件」を媒介として作用するものであるからであり、心的活動は、外界の事物のもつ諸特性と、被刺戟個体のもつ内的諸条件との相関作用によるものである。

また、心的活動とよばれる大脳の機能は、客観的所与（外界の事物）の反射という受容的機能にとどまらず、客観的所与の中から、個体の内的諸条件にもとづいて、それと内的な連関性をもつものを選別し、分析し、総合する能動的、志向的な機能を具有している。

大脳のもつこのような志向的、能動的機能と外界の事物の含有する特性との相関作用によって生成されるイデーは、すでにその生成の契機において、志向性、能動性を具有したものである。[5] したがってイデーは、単なる外界の事物の受動的反映ではなく、人間主体の、外界の事物―世界に対する認識であり、態度[6]である。

上述のような本質と機能的特性をもつイデーとして、内面化された外界の事物（素材）の含有する特性（個体の内的諸条件と内的な連関性をもつ要素）が、イデーのもつ志向的機能と相まって、表現

—創作活動—への動因となったものが、モティーフである。

モティーフは、原義的には、あるものを運動にかり立てる根源力、運動の動因、作用因であるが、文学主体（作者）においては、それが表現衝動、創作衝動として働き、作者の意識内容（イデー）の形象的顕現を志向させるとともに、他方では、選別され、分析され、総合された素材（狭義でいえば題材）の文学的統一や、作品を貫く個性的な統一因となるものである。

想えば前掲の紫式部の物語論の一節は、このようなモティーフのもつ、創作上の重要性に触れたものであった。近年、作者主体とのつながり抜きのフィクションや、モティーフ喪失のいわゆる「よみもの小説」の横行を思い浮かべるとき、改めて、作者主体とのかかわりにおいて、モティーフのもつ意味を考えてみることは、無意味なことではなかろう。

では、紫式部自身は、どのような主体性において、どのようなモティーフに突きあげられて、創作活動、文学的実践に立ち向かったのだろうか。

だが、われわれはこの問題に立ち入る以前に、さらに根底的な事象についての考察が必要であろう。それは、すでに述べてきたように、モティーフ生成のモメントであるイデー、そのイデー生成の基盤にある作者主体の内的諸条件についてである。イデーの生成は、

素材（外界の事物）と、作者主体の内的諸条件との相関作用によるもので、この内的諸条件こそはイデーの構成要素（の一つ）であり、ひいてはモティーフ生成の一契機であるからである。

ところで、「作者主体の内的諸条件」といわれるものは、作者をとりまく環境その他の外的諸条件と作者個体との相互作用によって形成された反映像であり、意識現象である。

「あらゆる心理現象は、窮極的には外的作用によって条件づけられている。だがしかし、任意の外的作用は、これらの作用をうける個人の性質、状態、および心理活動をとおして屈折されることによって、ただ間接的にだけ心理現象を規定している」[7]

といわれているように、主体の内的諸条件は、つねに主体の内面に横たわっていて、それが外的作用と相関作用をともなうことによって、意識現象を生成させる。したがって、その「内的諸条件」といわれるものは、つねに意識の下に横たわっている「基体[8]」、つまり「意識基体」ともいうべきものである。

一般に、低次神経系の単純な無条件反射現象は論外として、知覚される外界の素材は、人間の「内的諸条件」—本稿でいう「意識基体」を媒介とした心的活動の過程で、何を、どのように感覚や思考の対象とするか、という選別を経て決定されるものである。外界のあらゆる諸物・諸事象が対象となるのではなく（言いかえると、外

界のすべての事物からの刺戟が、人間個体に心的活動を強いるのではなく)、人間個体の「意識基体」を媒介とした心的活動に対応して、それと内的連関性をもつもののみが、対象化に値するものとして選び出されるのである。

以上、述べてきたことによって、「意識基体」のもつ本質およびその機能的役割は、おおよそ察知されるであろう。とすれば、まず、この「意識基体」が問われて然るべきであろう。

そこで、紫式部の「意識基体」を問題としたいと思うが、それは、式部の創作方法において、どのようなイデーを、形象化しようとしたかというような表現主義的立場からではなく、作者のどのような個性的な「意識基体」が、素材と相互に作用し合いながら、素材のもつ特性を対象化し、芸術的形象化に向かわしめたか、という観点から、式部という主体の基底にただよい流れていた「意識基体」を明らかにしたいと思う。

同じく平安中期摂関体制下に生きた、紫式部と清少納言という二人の女性が、前者は贈太政大臣藤原冬嗣の子孫として、後者は天武天皇からの末流として、それぞれ名門の家系に生まれ、前者は兼輔—雅正—為時という歌人・文人の家筋の中に育ち、後者は清原深養父—元輔という歌人の家筋の中で成長し、両者ともに受領としての父をもち、ともに一条帝の後宮女房となったこの二人が、極めて類似した家筋・身分・地位・環境にありながら、彼女たちの作品が異質の方向を示している根拠は、どこにあるのか。それこそ、この二人の生活態度の基底に流れていた「意識基体」の相違に、源を発しているというべきであろう。

このような作者主体の内的諸条件(内面世界の状態)の反映としての「意識基体」というものは、いわば、その作者の主体的原点ともいうべきものである。

(注)

① 日本古典文学大系『源氏物語』㈠、四三二頁。

② 「今日の文芸学では、一般に素材とイデーとの結合の所産とされ、イデーにより精神化され詩的に形成された素材の各要素を意味する」(平凡社『哲学事典』モティーフの項)

③ パヴロフの反射理論。

④ キセリンチェフ『反映の理論』—「大脳皮質の全活動は、或る反映活動、すなわち外的諸刺戟に対する、客観的な諸物や諸事象の諸特性ともろ〳〵のつながりとに対する、分析的および綜合的活動である。」(田辺振太郎・山内孝郎氏訳、一五八頁)。ルビンシュティン『存在と意識』—「反映活動としての心理活動は、分析的総合的活動である。」(寺沢恒信氏訳、二六七頁)いずれもパヴロフの理論にもとづいている。

⑤ ルビンシュティン『心理学』―「意識は存在の表現されたものであり、また存在に対する個人の実践的態度である。人間の意識は従って知識を含むのみならず、世界のなかにあって人の欲求、興味などに対する関係のため人にとって意味ある事柄の体験を含む。この故に心理には力動的な傾向と力があり、それ故に活動性と選択性がある。」（内藤耕次郎・木村正一氏訳、上巻二〇六頁）

⑥ 「態度」という概念は、哲学・心理学・社会学その他で種々に説かれているが、ここでは要するに外界の諸物、諸事象に対する行動への心的準備状態と解して用いた。

⑦ ルビンシュティン『存在と意識』（寺沢氏訳、二七頁）

⑧ 今日やや広義に用いられるものよりも、もっとせまい原義をもつギリシャ語の hypokeimenon の意味での、〃下に横たわるもの〃〃もとになるもの〃を意味する。「意識基体」という場合、レヴィンの心理学で使用される「生活空間」の概念に類似する点がある。その他、心理学の方面で、「下意識」・「固有意識」・「下位意識」・「前意識」・「基調意識」などの概念用語があるようであるが、それらの厳密な分析は、専門外の筆者のよくするところでないので、自己流の用語を寛容せられたい。

（二）

では、その「意識基体」はどのようにして追求されるものであろうか。それは外部から直接観察しがい心理現象である。だがそれは、意識一般がそうであるように、やはり外界素材と主体との相互作用によって反映として生成されたものであり、主体の生活態度を、客体との対応関係の中で現象せしめたものである。したがって、それの追求は主体の心理現象を規定している現実の生活、体験をよりどころとして、それの内容や内面的意味を解明してゆくところに道が開かれるのではなかろうか。

このような観点から、紫式部の生活体験をよりどころとしようとする場合、乏しい資料のなかで、彼女自身が遺している生活体験の報告として、日記と家集とが当然注目の的となる。このとき、紫式部日記の中で述べられている次の一節は、きわめて示唆深いものとして想起されるのである。それは、周知のものであるが、

「この式部丞という人の、わらはにて書（ふみ）読み侍りし時、聞きならひつつ、かの人はおそう読みとり、忘るるところをも、あやしきまでぞさとく侍りしかば、書に心入れたる親は、『口惜しう、男（をのこ）子（ご）にてもたぬこそさいはひなかりけれ』とぞ、つねになげかれ侍りし」①

という一節である。これは、もちろん式部自身が年少時からの聰明さを、ひけらかしたというような単純なものではなく、やはり式部自身のモティーフに即して、「書かずにいられなかった」一節であろう。では、どのような意味で、書かずにおれなかった一節なのか。これについて、岡一男氏は、以前に、

『この式部丞といふ人の』と惟規を官名で呼んでゐるのは、惟規が弟で、他の弟惟通と区別するためで、若し彼が兄だったら、『兄(このかみ)なる人の』とか、『このせうとなる人の』とか言っただけでわかったであろう。尤も異本には『このかみ式部丞といふ人の』といふのもあり、弟でも、長男の場合はこのかみ・せうとといふ例があるが、なほ為時が『をのこごにてもたらぬこそ幸ひなかりけれ』と口惜しがったのは、彼女の方が年長であったからしい。それに兄がかう自分より才学が劣ってゐたとは言ひにくいが、弟の場合なら当然のこととも言ひ得て、少しも惟規を傷けることにはならぬ。ただ年齢が余り違はず、女性の身で、よく『史記』を理解しえたところに、紫式部の俊敏さが伺はれるのである。

ここで重要なのは。この父の言葉が紫式部をして、ファザー・コムプレックスと女性劣等感と男子拮抗の錯綜を幼い深部心理に牢固として植ゑつけさせてしまったことである。[2]」

と論じられた。ところが、その中で惟規弟説を創唱された点について、丸山キヨ子氏は疑問をもたれて、

「『かの人はおそう読みとり、忘るるところをも、あやしきまでぞさとく侍りしかば』といふ辺り、兄に対してならば聡い妹としてその云ふところを興味深く受け取れると思ふが、弟に対しての言とすると、あまりふさはしくない表現のやうに思はれるが、如何であらうか。[3]」

と反問され、また手塚昇氏も

「この話は、惟規の童の頃の事で、式部が惟規の姉であったなら、惟規より式部がよく習いおぼえても、別に不思議はないので、妹であって惟規より一つ二つ幼少であるのに、よく習いおぼえたから、男だったらと思ったものであろうと思われる。それに文に心を入れた親だとあるから、姉だったら惟規と一緒に読み習わせたかも知れないが、まだ式部が幼少であったことを思わされるものが多い。[4]」

と反論されている。これらの説に対して、岡氏は、

「彼が父為時について漢籍の読み方を勉強していた時分に、彼女がそのそばについていて、亡き母代りに、その覚えかたの遅く、忘れるところをも、式部自身我ながら不思議に思うほど、すばしこく覚えていたので、学問熱心の父親が、『残念だ。お前を男の子としてもたなかったことが、おれの一生の不幸だ』といって、い

つもこぼしていたということで、『私は子どもの頃に兄より学問ができた』と、いばっておるのではないのである。彼女が惟規の姉であってこそ、『くちをしう、をのこごにてもたらぬこそ』という為時の嘆きも真実性をもって聞かれ、またこの文章を惟規が読んでも怒らぬし、また世間にこの話が伝わっても惟規を傷つけないのである。紫式部は幼少学問嫌いであった弟をひとかどの官人にした内助の功を誇っているのである。またいくら学問熱心だといっても、儒者の為時が自分のむすめに漢籍を表向き教えることは、為時としてやらなかったにちがいないと思う。[5]」と応答されている。

丸山、手塚両氏は、式部が妹であってこそこの一文に意味があるとされ、逆に岡氏は式部が姉であってこそ、父為時のことばに真実性が増すし、弟の惟規を傷つけないのだとされているのである。ところで、紫式部は日記や家集において、父や姉や惟規についてはふれているが、母については全くふれたところがない。これはよほど幼少時に死別したためであろうと思われるが、そのため、かりに式部が姉で、惟規が弟としても、この二人の年齢はごく接近していて、惟規の幼少時に同じく幼少の式部が、母代りに惟規の学習の席について教えたというようには考えがたい。ここはやはり、詩文の家として立つことを志していた為時が、その後継者たるべき惟規

に、幼少時から学問の指導に当たっていたのを、幼少から学問好きであった式部が、その傍で聞いていて聰明に理解したということであろう。しかし、それだけでは式部は姉とも妹とも考えられる。ところが、『惟規集[6]』をみると、次のような歌がある。

わかきひとを　をやのたのめけれは　わつらふころ
わか葉さすいはねのまつのをひすゑをむまれゆくみのいかかたのまむ

この大要は、「まだ年少の人を、父親為時が私に（この人は将来頼りになる人だから、お前も頼りにせよと、つねに、）頼りに思わせたので、てこずっていた頃に詠んだ歌――若葉の出たばかりの、岩根に生えた小松（まだ幼少の人）の生い先を、私自身これから成長し世に出てゆく身として、どうして今から頼りにしておれようか」というような意であろうと思われる。父親が頼りに思わせようとした「わかき人」こそ、紫式部であったのではないか。父為時が式部の利発聰明さを評価していて、折にふれては、「この子は将来えらいものになるぞ。お前もこれから相談相手として頼りにせよ」と言っていたものであろう。その「わかき人」を惟規は、「若葉さす岩根の松」と詠んでいる点から思うと、惟規より年少者であったろう。すなわち、やはり惟規が兄で、式部は妹であったと推察される。

では、何故に、妹の式部が兄のことにもふれた、このような記事を書いたのであろうか。「書かずにおれなかった」モティーフ、そしてそのモティーフの生成に関与する意識基体はどのようなものであったのか。

ここに至って注目すべき点は、岡一男氏の述べられている前掲引用文の最後の論旨である。すなわち、「ここで重要なのは、この父の言葉が紫式部をして、ファザー・コンプレックスと女性劣等感と男子拮抗の錯綜を幼い深部心理に牢固として植ゑつけさせてしまった」と述べられている点である。これは、まことに示唆深い論断であると思われる。以下、この点についての私の考えを述べつつ、紫式部の意識基体の解明に進みたい。

（注）

① 『紫式部日記』（日本古典文学大系、五〇〇頁）

② 岡一男氏『源氏物語の基礎的研究』（六一・六二頁）

③ 丸山キヨ子氏「源氏物語における仏教的要素――紫式部と定遍」、東京女子大学付属比較文化研究所『記要』第十八巻・昭和三十四年十一月刊。

④ 手塚昇氏『源氏物語の再検討』一八六頁。

⑤ 岡一男氏『増訂源氏物語の基礎的研究』補遺六一六頁。

⑥ 『惟規集』は高松宮家に一本と、書陵部に一本がある。本文に引用した部分については、両本間に異同はない。

（三）

紫式部の出生年次については、古来いろいろと異説があって、まだ定説とされるものがない。これについては別の機会に、より詳しい論証をしたいと思うが、私の推定では、彼女は天延三年（九七五）の生まれであろうと思われる。この論拠を簡単に述べると、紫式部日記の寛弘五年十一月廿二日童女御覧の後日譚の記事中に、高松殿腹の小さい公達が女房の局に出入りを許されて、絶え間なく走りまわられるので、

「さだすぎぬるを功にてぞ、かくろふる」①

と述べている。この「さだすぎぬる」は式部個人の主観叙述ではなく、自他ともにそう認めていることを示している。これによって、式部は三十歳を超えていたことが察せられる。また、例の消息文体（寛弘七年）の中で、出家の願望をのべて、

「としもはた、よきほどになりもてまかる。いたうこれよりおいぼれて、はためくらうてきやうよまず、心もいとゞたゆさまさり侍らん物を」②

と記している。ちょうど出家をするによい潮時といっているのは、三十七歳の女の重厄を前にしてのころであろう。「細流抄」に、

「女は三十七重厄也。薄雲女院も三十七にて崩じ給へり云々」

とあり、病気にかかって、出家を願う紫上も「今年は三十七にぞなり給ふ」（若菜下）と、わざ〳〵特記されているし、六条御息所も三十六歳の秋に重病にかかり、急いで出家している。このように式部は物語の中でも三十七の女の重厄を、かなり意識して書いている点からみて、日記で記す、出家をするのに、「年もはたよきほどになりもてまかる」のことばは、女の重厄を目前にしたころの表現であろう。とすれば、寛弘七年（一〇一〇）に式部は三十六歳（厄年を迎える前）ごろであった。逆算すると天延三年（九七五）の生まれとなる。（「いたうこれより老いぼれて、はためくらう……」は、これから先の将来のことを仮定して言っているので、三十六歳の当時の状態をのべているのではない）

その式部が兄惟規のそばで父の講義を傍聴していたのは、惟規の「童」のときで、これは元服前の少年のとき、すなわち十歳ごろかと思われ、式部はそれより一、二歳年少であった。惟規の年齢について、岡一男氏は、

「寛弘四年正月十三日に兵部丞庶正とともに蔵人に補せられてをるが、道長は、『件両人頗年長、蔵人宜者也。仍所二補被一耳、任後人不レ知二賢愚一』と記してゐる。頗る年長とあるから、惟規は三十四五になってゐると思ふ。[9]」

といわれている。とすれば惟規は九七三または四年の生まれとなり、式部より一、二歳の年長となる。この両人が十歳および八、九歳のころというと、天元五年（九八二）の頃になる。問題となるのは、そのころの父為時の状況である。

為時は天徳四年（九六〇）三月三十日に清涼殿で行なわれた内裏和歌合に、左方の殿上童として奉仕している。[4]その時奉仕していた童たち[5]のうち、年齢を明らかにしうるものを拾うと、藤原道隆（八歳）[6]、同朝光（十歳）[7]、同時光（十三歳）[8]などで、その時の殿上童たちの年齢は、大体十歳前後であったと思われる。したがって、家格の低かった為時などは、多少長じていたものと思われるので、[9]かりに十三歳と推定すると、天暦二年（九四八）の生まれとなる。その為時の天元五年（九八二）時代は三十五歳のころである。

その為時は、安和元年（九六八）十一月、二十一歳の時、播磨権少掾（従七位下相当官）に任ぜられたが、[10]わずか半年余で離任して後は、官途不振のまま文章生として学問の道に精進していたが、彼が三十歳になった貞元二年（九七七）の春三月二十八日、円融帝の東宮（後の花山帝）の読書始めに、東宮学士・文章博士菅原輔正の尚復（副侍読）として奉仕する栄に浴した。[11]侍読をつとめた輔正は、道真の曽孫で当時文章道の第一人者で、後には贈正一位、北野宰相と呼ばれた人であったが、その人の下で、多くの文章得業生や

文章生を超えて、副侍読に抜擢されたことは、文に志す為時にとって、その栄誉は大きかった。微々たる一介の地下人が、その学才を認められて、王卿高官の居並ぶ東宮の御前で、晴れの役[12]を奉仕したことは、彼の生涯に忘れえない感激であったろう。同時にまた、当日の主役を勤める文章博士輔正の晴姿は、文章生為時の眼底に、将来の理想像として濃く焼きついたことであろう。――輔正のような人物になりたい。自分も「詩文の家」といわれるようになりたい――このような夢と希望が、為時の脳中に溢れ満ちたことだったろう。

今を時めく摂関家と同じく、冬嗣の血統をうけながら、為時の祖良門は兄良房（摂関家の祖、摂政・太政大臣）と異なり、従四位下、内舎人の微官にとどまった人であった。良房の嫡流は氏の長者としてつぎ〳〵に権勢栄職を占めていたが、嫡流以外の多くの末流は、宿世のつたなさをいたずらにかこたねばならなかった。

このような中で、為時の祖父兼輔は中納言にまで栄達したが、父雅正（まさただ）は従五位下の受領層として仕える身であった。しかし、兼輔は風流の聞こえ高く、世に堤中納言と称せられ、三十六歌仙の一人にもえらばれ、古今集以下の勅撰集に五五首の入撰歌をもつ、延喜歌壇の重鎮であった。雅正もまた後撰集に七首の入撰歌をもつ歌人であり、その弟（為時の叔父）清正も勅撰集に二八首の入撰歌があり、『清正集』を遺している歌人であった。すでに岡博士が指摘されているように、後撰集や伊勢集に収められている雅正と伊勢との贈答の中で、伊勢は雅正の家門を「名だたる家（歌壇の名門）」と称揚し、雅正もまたそれを自認していたようである。

為時もまた、「宿世のつたなさ」をかこちながらも、他面において、この「名だたる家」としての自覚と自負とがあったであろう。

そのような中で、大学寮の文章生となった為時は、権勢栄達の世襲的状況のもとで、個人の才能を伸ばすことのできるのは、学問詩文の世界しかないことを悟っていたのではなかろうか。このような意識基体にもとづいて、微官ながらも学問の道に精進してきた為時が、苦節十年、三十歳になって、その師菅原文時（道真の孫。文章博士、菅三品と称せられた大儒）の推挙もあったろうが、東宮読書始めの副侍読たるの栄をかち得たのだった。

ここにおいて、祖父兼輔以来の「歌壇の名門」としての誇りをもっていた為時が、より以上に自分の才能に適した「詩文の道」への希望を燃やし、将来「学問詩文の家」として立つ契機をつかんだのであった。しかしその道は平坦安易なものではなかった。彼はその後も依然たる微官の中で数年の歳月を送ったのだった。

長男惟規への学問教育が始められ、続けられたのは、まさにこの間のことであった。「詩文の家」を起こそうと念願していた為時が、

自家の後継者たる長男にかける期待は大きく、熱心にその教育に努めたのは当然であった。「書に心入れたる親」と式部の日記に記されるのは、このような為時の姿をさすものであった。

このような為時にとって、学才豊かな子供をもつことは、何よりの希望であり、期待であった。その期待をかけられた長男惟規も凡庸ではなかった。『惟規集』一巻を遺し、後拾遺集以下の勅撰集に十首、続詞花集に二首の入撰歌をもつほどであるから、かなりすぐれた歌才のあったことが知れたる。官途においては、三十歳を越えた寛弘初年ころ、少内記に任ぜられている。[14] 少内記は詔勅の起草、叙位の辞令、上奏文や宮中の記録事務を司り、儒学者や文才のある者が任ぜられた官職であった。次いで寛弘四年には兵部丞で蔵人に補せられている。[15] この蔵人の職も伝宣・進奏・除目・諸節会の儀式などの事務をつかさどったもので、時として名門の子弟が形ばかりに任ぜられることもあったが、実務においては凡庸の士では勤めかねる枢要の職であった。さらに紫式部の日記執筆時には兵部丞から式部丞に任ぜられたようで、惟規はけっして凡才ではなかったと思われる。なお、彼の風格・人柄については、『惟規集』・『難後拾遺抄』・『金葉集』（雑上、五八三）・『後拾遺集』（恋三・七六四）などに、またその臨終の模様は、『俊秘抄』・『今昔物語』（巻卅一、第廿八）・『十訓抄』等において伝えられている。

にもかかわらず、この惟規が父から漢籍の講義を受けていた時、それを傍聴していた式部が不思議なほどよく理解したので、父の眼をみはらせ、思わず「口惜しう、男子にてもたぬこそ幸ひなかりけれ」と嘆かせたものであった。もしこの娘が男子に生まれていたら、きっと自分の志をついで、立派に「詩文の家」たるの念願を果してくれたろうに、残念だ、不運なことだと言わせたのである。しかも、天下の「詩文の家」たらんとする為時の執念が、強ければ強いほど、この感慨は一再ならず、その口の端にのぼるのであった。「つねに嘆かれ侍りし」の表現は、それを語っている。

ここに至って、「この式部丞云々」の一節は、単に式部の才能云々ではなく、為時一家の詩文の道への執念のごときものを語っているように解せられてくるのである。

（注）

① 『紫式部日記』（日本古典文学大系、四八二頁）

② この部分は諸本において異同が多いが、ここでは、松平文庫本に拠った。

③ 『源氏物語の基礎的研究』（五二頁）。ただし、文中に「庶正」とあるのは「広政」がよいのではなかろうか。（『御堂関白記』さらに『権記』―寛弘四年七月三日・十一月一日・同六年三月四日条「広政」とある）

④ 天徳四年三月三十日内裏和歌合―仮名日記（十巻本・二十巻本とも）

⑤ 当日奉仕の殿上童の人数・人名については、「殿上日記」・「仮名日記」（十巻本）・同二十巻本三者の間に異同がある。

⑥ 藤原道隆（九五三―九九五）兼家の長男。師輔の孫。

⑦ 藤原朝光（アサテル）（九五一―九九五）兼通四男。師輔の孫。

⑧ 藤原時光（九四八―一〇一五）兼通二男。師輔の孫。なお、「仮名日記」の童名の中に、藤原惟賢（ノブカタ）の名があるが、岡一男氏はこの「惟賢」を歌人の惟成の弁と同一人とし、当年八歳と推定されている（『源氏物語の基礎的研究』三九頁）が、「殿上日記」の童名の記載では「延方」とあり、本文中にも「小舎人紀延方」と記されているので、この紀延方のことであろうと思われる。萩谷朴氏も『平安朝歌合大成』(二)において、「紀延方」の方を採っておられる。（三九六頁）

なおまた、「藤原惟賢」は、他に、後の太政大臣伊尹の男で蔵人にもなった「惟賢」（同じく師輔の孫）があり、天徳四年には伊尹はまだ三十七歳の参議であり、その男「惟賢」には、当時八歳の次弟挙賢、七歳の弟義孝があり、「惟賢」は殿上童として適わしい年齢であったと思われる。さらに右大臣定方の男の中納言朝成（アサヒラ）の長男にも「藤原惟賢」（後に、従五、近江守）がある。朝成は、天徳四年、四十四歳の参議であったから、朝成の長男「惟賢」は、殿上童の年齢よりはもっと長じていたであろう。

よって、かりに「紀延方」の外に、「藤原惟賢」も殿上童として奉仕していたとすれば、参議伊尹の男「惟賢」が適わしいであろう。いずれにせよ、「延方」あるいは「惟賢」をあげて、年齢例示の対象にするには、なお、確実性を欠くので、ここでは除外しておいた。

⑨ この点に関して、岡一男氏は、「この歌会の『仮名日記』に左の童を批評して、『おほきさ、ととのほらずといふ。よしき童の中に交りて騒ぐ。大きにて片はにもあらじと思ひたるなるべし』と言ってゐるからである。嘉樹は蔵人で、それがまじっても変ではないというのだから、童といっても、大分年齢に相違のあったことがわからう。道隆や朝光は右大臣師輔の孫で、門閥の関係で幼弱でも選ばれたのであらうし、為時などは稍々年長であった方かと思ふ」（『源氏物語の基礎的研究』三九頁）と述べておられる。

ただし、その推定の根拠として挙げられた「仮名日記」の「おほきさ、ととのほらずといふ……云々」の一節は、為時ら殿上童について述べているものではなく、「村上天皇御記」・「殿上

日記」・「仮名日記」（岩波古典大系「歌合」所収の乙本・丙本）など、すべて「童女」とか「うなひ」とか記されているもので、右引用の一節は少女たちの様子について述べた記事であるから、ここでの資料としては、関係のないものであろう。

⑩『類聚符宣抄』第八任符。

⑪『日本紀略』・「大鏡裏書、四〇」

⑫ 東宮読書始めの儀式次第は、

「皇太子書始、

太子着座、総角、青色衣、不帯剣、王卿着、皆持書巻副刻、侍臣両三出候、博士尚復着座、学士殿上成業六位、皆展書、尚復唱文長、博士読御注孝経序五字、尚復云、此許詞云、ココ末天、次尚復読五字如先、博士等立、王卿立、入御、着饗、給祿、大祓大臣加御衣、博士赤袴、尚復赤被、皆拝、無作文御遊等、」（西宮記巻十一）

とあるのを見ても、尚復はかなりの大役であることが察せられる。

⑬『源氏物語の基礎的研究』三七頁。

⑭『御堂関白記』長保六年一月十一日・同三月四日・寛弘二惟十一月十日条などに、「少内記惟規」とある。

⑮ 同書寛弘四年正月十三日条。

（四）

さて、前節でみてきたような為時一家における事情は、紫式部の意識基体を追求しようとする場合、重要な意味を提示していると思われる。すなわち、右のような事情を含む特性が、式部の生涯に強い規制や影響を与えていたと見られる意識基体の生成に、大きな連関をもっていたと思われるからである。

家庭における子弟への講席でもらされた為時のあの感慨は、詩文の道に志し、多年の精進の結果、三十歳になってかち得た東宮読書始めの尚復の栄誉も、現実の官吏生活には何ら目立った変化をもたらすこともなく、依然として七位程度の地下の微官にあった頃のものであった。その感慨の下に横たわる意識基体には、大別して二つの側面があったと思われる。すなわち、その一つは、多くの文章得業生や文章生の中から選抜されて尚復にもなりえたという、自己の学才に対する自負、それにもとづく優越感、いま一つは、そのような学才も家格が劣っていれば社会的には認められる機会が少ないことによる劣等感である。

このような二つの側面をもった為時の意識基体は、現実に対処してゆく心的準備状態としての「態度」として、自己の学才を存分に発揮できる詩文の道を志向させていた。その時式部の豊かな才能を

発見することによって、右の感慨が表明されたのである。

ところが、為時のこの感慨の表明は、幼少の式部に対し、為時自身のものとは質の異なった、「優越感」と「劣等感」を同時に生起させたものであった。すなわち、すぐれた詩文家としての父から才能を認められ、たのもしがられたという事は、式部をして、自己の才能というものについて意識させ、延いては「優越感」や自意識生成の契機となったことを見のがしえない。式部にとって父為時は最初の知己であった。そして式部にはこの父の期待に副いうるようになりたいという「態度」が、彼女の意識基体の一つの側面となったことが察せられる。

ところが反面、「詩文の家」を樹立することを念願している父に、「男でなかったのが、わが家の不幸だ」と嘆かせたことは、彼女にとって、大きなショックであったにちがいない。父の嘆きの根因は、自分が「女」に生まれたことにある。そのことが父に「不幸」感を与えている。自分の才能を認めてくれた最初の人である敬愛する父に対し、「不幸」感を抱かせるような自分は、何という「不孝」な存在であろう――このような意識の生起は、式部にとって、自己の存在意義を根底から問われているに等しい事象であった。紫式部は、幼少時において、すでに早く自己の存在原点への内省を迫られていたのであった。

父為時のことばは、このような意味で、幼少時の式部に、一面において「優越感」―自意識の生起をもたらし、他面において、式部の心中に内的しこり―「劣等感」―自己の存在原点への内省、疑念を生起させる契機となった。このような「優越感」（自意識）と「劣等感」（存在原点への疑念）とは、式部の生活態度の下に横たわる意識基体の二つの側面であったと言えるだろう。

ところで、「優越感」は自己顕示の方向をたどりがちであるのに対し、「劣等感」は逆に自己嫌悪・自己閉塞の方向をたどりがちであるが、この二つの性向は、その本質においてかならずしも平行、対立的なものではない。自己嫌悪などの劣等感は、かならずしも客観的劣性のみから生起するものではなく、主体の内的要求の強さに対応して生ずるものでもある。尊大さや空威張りの形であらわされる優越感が、実は劣等感の裏返しの表われであったり、自己嫌悪や自己閉塞の劣等感が、高度の人格的な内的要求に対応して生起している場合も多い。「優越感」と「劣等感」とは同じ心理現象の両面で、二つは表裏・相関の関係にあるものでもある。

紫式部の場合も例外ではなく、これらは式部という人格のそれぞれの側面であった。式部という人格において顕著にあらわれた、このような二つの側面の関係を、どのように統一してゆくかが、式部の人間形成の課題であったといえる。

幼少にしてすでにこのような課題を背負わされた式部は、どのようにこの課題に対処して行ったのであろうか。式部は、自分が「女」に生まれてきたために、父に対して「不幸」を嘆かせる因となり、自己にとっては父を嘆かせるような「不孝」者としての嘆きの因となった。だが、「女」として生まれたということは、自分の意志ではどうすることもできないもので、それこそ「宿世」であり、「宿世のつたなさ」によるものと思わねばならなかった。「宿世のつたなさ」ということは、前世での因縁が悪かったためで、とりもなおさず、自分は「罪深い身」であると感じられてくる。そう思うと、幼少の時に母と死別したのも、（年ごろになっての姉との死別も、結婚してわずか二年余りで夫と死別したのも）、その因果であろうと思われ、この世は「憂き世」として実感されてくる。（これらは一種の融即的心性にすぎないのだが。）このようにして、式部が自分の「宿世のつたなさ」や、「罪深い身」を内省するとき関心はおのずから自己に集中し、内向的になる。かくて、彼女の脳中に去来するのは「孤愁」の感であったと思われる。それは自己の「宿世」に対する「劣等感」というべきものであったろう。

だが、その反面には、父から自分の才能を認められているという「優越感」が式部にはあった。そこから生起する自意識は、かの「劣等感」への永遠の屈従に堪えさせないものを志向させた。

この「優越感」と「劣等感」とは、式部という人格の心的活動の底面につねに横たわっていた意識基体の二側面であった。そしてそれは式部自身の生活態度を終始規定しつづけていたもので、式部の生活態度はこの二つの側面の葛藤、およびその統一を目指す心的活動の上に現象されていた。

『紫式部集』は、式部自身の、(1)娘時代、(2)結婚時代、(3)寡居時代、(4)宮仕え時代にわたってほぼ全生涯の心情記録とみられるが、前述の事情を、この家集によって大観するとき、(1)の時代には、彼女の才能を高く認めてくれていた、父為時をはじめ伯父為頼、親しい友人たちが心の支柱となり、彼女の自意識、優越感を比較的優勢に保持させていたようであり、(2)の時代は夫宣孝が彼女の才能を認め、おおらかに引き立ててくれたため、やはり自意識や優越感の方が優勢を保ちえていたようであった。ところが、(3)の時代になって、知己としての夫に死別してからは、家集におけるその頃の歌に、自分自身を、

「色ならぬ心」の人（四二）
「世のはかなきことをなげく」人（四四）
「世中のさはがし」と思う人（四八）
「世を常なしと思ふ人」（四九）
「身をおもはずなりとなげく」人（五〇）

などとする表現が目立ってきている。すなわち、この時期は式部において「宿世のつたなさ」が痛感され、それからくる「劣等感」が支配的であった。（当時においては、若い身そらで夫に死別するのは、宿世がつたないためと一般に思われていた）

ところが、このような劣等感が濃厚になると、一方において、それを「補償」しようとする傾向が生じる。「補償①」の手段には個体の内的諸条件や、社会的諸条件によって、種々のタイプがあるが、式部の場合、自己の劣等感の対極として存在する「優越感」すなわち自己の才能を父から認められているという意識基体（内的条件）にもとづいて、その父の期待に副うためには、自己のもつ才能を充分に発揮しようと努めることにあった。源氏物語著作のモチベーションもこの辺のところに、その一端を求めえよう。その執筆がはじめられたのも、おそらくこの時期であったろう。

しかしながら、紫式部の「女」としての性に対する劣等感や、「宿世のつたなさ」による劣等感が、「補償」への志向によって、ただちに克服されたり、解消したりするようなことはない。劣等感の根が深ければ深いほど、補償作業は継続され、強化されねばならないはずのものであった。しかも、式部における補償作業は、父の嘆きに端を発する彼女の存在原点への内省にもかかわるものであった。このような内省にもとづく彼女の宿世感や孤愁感は根の深いものであった。

ところが、この「孤愁」感は、「愛」と両極性をなし、その根底において「愛」を求める心情と連なっている。しかしその「愛」はかならずしも異性のみを対象とするものではなく、むしろ自己の孤愁を理解してくれる人ー「知己」を求める心情と相関するものである。紫式部集において、その冒頭から十数首にわたって、親しい友との別離の悲歌を配列しているのも、「孤愁」の理解者としての親友との別れの悲しさが、深く式部の心をとらえるところがあったからであろう。

また、二十歳ほども年長の宣孝と結婚したのも、瀾達な人柄の宣孝が、式部の才能を高く評価し、その「孤愁」をよく理解してくれたためであったろう。さらに道長の妻倫子も、式部の娘時代から、結婚し、未亡人となって後も、式部を理解し、温かく庇護してくれた「知己」の一人であったろう。これらについては、別の機会にそれぞれに即して具体的に述べたいと思うが、いまはその一部として、倫子との交情について例示しておくにとどめたい。それは古本系紫式部集（定家本系にはない）において、式部が夫宣孝と死別し、「宿世のつたなさ」を痛感し、いよいよ「孤愁」の感を深めていた頃の歌を十余首ほど並べている中に、次のような歌がある。

八重山吹を折りて、あるところに奉れたるに、一重の花の散り

残れるを、おこせ給へりけるに

折からをひとへにめづる花の色はうすきを見つつうすきとも見ず

この歌の前後には、夫との死別後の悲しみを詠んだ歌がつづいている点からみて、この歌もやはりその頃のものと思われ、あるいは長保四年、夫の一周忌前後のものかと思われるが、庭に咲いた八重山吹を手折って（詞は添えず）ある貴人に贈ったところ、その人から散り残った時季おくれの一重山吹を贈ってきたときに詠んだ歌というのである。

ところで、貴人（奉れたるというような敬語を用いているのは、家集の宮仕え前の歌には他に例がない。夫にも友人にもつけていない点から、かなり身分高い人と考えられる）に、詞も添えずに花だけを贈ったのは、花そのものに何らかの意味のある場合以外には、普通にはしない行為である。では式部は、この八重山吹にどのような意味をこめて贈ったのであろう。それは山吹の色は濃黄で、くちなし色ともいい、そのくちなしを口無し・物言はぬ意にひびかせたものである。このような例は古今集その他にも見られる。[2]

すなわち、この山吹は、夫との死別の悲しみに沈みがちであった式部が、彼女の理解者であった貴人のもとへ、「亡き夫のことが八重に偲ばれ、悲しくてなりません。しかし、いくら嘆いてもかえらぬこと故、今後は、この山吹の色のように、言わで偲びたいと存じます」というような意味をこめて贈ったものであろう。これに対しその貴人は、野生の一重山吹の散り残っていたのを折って、やはり詞は添えず贈ってきたのである。その心は、「言わでひとえに偲ぶのは、八重に言うよりまさっているものよ。どうかこの野生の一重山吹のように、ひとえに強く生きつづけなさい」というようなものであったろう。これは式部の曽祖父兼輔の、「わが着たる一重衣は山吹の八重の色にも劣らざりけり」（後撰集一〇八）の歌や、あるいは拾遺集の「わが宿の八重山吹は一重だに散り残りなむ春のかたみに」（七二）などをふまえたものであろう。

だからこそ式部は、「（たとえ時季おくれの花であっても、贈られたその折の条件に応じて）おりからを賞すべき花は、贈主のお心によって一入感興深く感じるもので、いまこの薄黄（薄きとかける）色の花を見ながら、濃く深いお心持に感激しております」と詠んだのである。

時季おくれの散り残りの花を人に贈るというようなことは、相手が十分教養・知識のある人でなければ、誤解されるおそれのあることである。にもかかわらず、そのような花を贈ってきたのは、相手が式部の人間も教養も十分に理解していたからであった。その相手は、やはり「知己」であった。

では、その貴人とは誰であろうか。式部の歌の内容が亡夫を偲ぶ

悲しみの私情にある点、そのような私情を訴えることの許されるような貴人でなければならない。中宮彰子か？　しかし、この歌は宮仕え前のものであり、宮仕え前にこのような歌を贈るほど中宮とは親しい関係はなかった。[8] では道長？　これも事情は同じであった。そこで想起されるのは、式部にとって、またいとこであり、夫宣孝にとっても、またいとこであった道長の妻倫子である。亡夫が倫子にとっても縁者であるからこそ、式部が夫を偲ぶ私情を訴えることが許されるのではないか。倫子は早くから縁者の為時の娘に才能のすぐれたのがいることを聞き知って、式部に目をかけてやっていたのであろうと思われる。

紫式部はこのような「知己」に支えられ、励まされて、自らの「補償」作業を強化し、生きつづけたのであろう。

だが、しかし、単に生きつづけるだけでは、式部自身に課せられた課題の何らの解決をも意味しない。すでに述べてきたように、紫式部の根源的な意識基体の形成的契機となったとみられる父為時の嘆言は、式部自身が「女」に生まれてきたことに端を発していた。それは式部にとって、自己の存在意義を根底から問われる事象であった。とすれば、自己の存在原点の問い直しこそが、式部の生きる意義であったはずである。

したがって、存在原点の問い直しは、まず「女」に生まれたことに向けられねばならない。

そこから、

一体「女」とは何であるのか。

「女」では、なぜいけなかったのか。

「女」と生まれてきた以上、どう生きたらよいのか。

「女」が罪深い身であるとすれば、女というものは、幸せや孝行とは果して無縁のものなのか。無縁でないなら、女の幸せとはどのようなものなのか。

世の中とはどのようなものなのか。

宿世―人間の運命とは何か。

人間とはそもそも何なのか。

等々、「女」というものについての根底からの問い直しが、歴史社会との関連において、はてしなく拡大し、式部の脳中に渦を巻いていたにちがいない。

このような意識基体は、当然(4)の時代にもひき継がれて行ったと考えられる。

紫式部の意識基体（それは単一体ではなく、複合（コンプレックス）であるが）は、優越感と劣等感とを両極性とする相関の中での「補償」作業としての、自己存在の問い直しにあったと言えよう。そして、このような意識基体にもとづく自己存在の問い直しの行為が、源氏物語の

創造であった。

源氏物語中の主要人物が、ことごとく「孤愁」にあえぐ人物ばかりであり、そのため源氏物語が、「孤愁の文学」とさえ考えられるのも、また「女のための文学」といわれ、「罪の文学」といわれ、「宿世の文学」といわれ、「〃世の中〃の文学」といわれ、「物のあわれの文学」（物のあわれは、右のような諸側面と深く関わる感情である）などといわれるのも、すべては、上述してきたような紫式部の意識基体と、その根底において深く関わるところにあったと思われる。

現代のわれわれが、紫式部から学びとるべきものは、単に彼女の人生観とか文学観とか宗教観とか思想とか言われるもののみではなく、むしろそれらのものを形成し創造した人間としての原点、その創造性の契機をこそ注視しなければならない。彼女が始めたところから学びとり、われわれ自らが始めることが必要なのではなかろうか。

（注）

① compensation—Aアドラーによって一般化された用語。個体が心身面の劣性を意識したとき、その劣性を補なおうとする心理的な動きをいう。

② 「山吹の花色ごろもぬしやたれ問へど答えずくちなしにして」（古今集、一〇一二）

「思ふとも恋ふともいはじくちなしの色に衣を染めてこそ着め」（古今六帖、五）

「くちなしの色に心を染めしよりいはで心に物をこそ思へ」（素性集）

「心には染めて久しくなりぬれどいはで思ふぞくちなしにして」（重之集）

「思はずに井手の中道へだつとも言はでぞ恋ふる山吹の花」（源氏物語・真木柱）

「枕草子」（〃殿などのおはしまさで〃の段）

（清少納言が女房たちから左大臣方の人だと中傷され、気をくさらせて里邸に帰っていた頃、中宮定子から秘かに文がとどけられたので、）「胸つぶれて、とく開けたれば、紙にはものも書かせ給はず、山吹の花びらただ一重をつつませ給へり。それに、〃いはで思ふぞ〃と書かせ給へる、いみじう、日頃の絶え間なげかれつる、みな慰めてうれしきに、……」（岩波古典大系、二〇〇頁）

③ 『紫式部日記』——「宮のおまへも、〃いとうちとけては見えじとなむ思ひしかど、人よりはむつまじうなりにたるこそ〃と、のたまはする折々侍り。」（岩波古典大系、四九八頁）

受贈雑誌（昭和四十五年度）

愛知大学論叢　四十一号〜四十五号
愛知県大説林　十八・十九号
国語国文学報（愛知教育大学）　二十三号
淑徳国文　十・十一号
紀要（青山学院女子短期大学）　二十四号
跡見学園国語科紀要　十八号
跡見学園女子大学紀要　三号
文学部紀要（梅花女子大学）　六号
文学部紀要（中央大学）　二十七号
中央大学国文　十三号
日本文学研究（大東文化大学）　九号
愛媛国文と教育　二号
愛媛国文研究　十七・十八・十九号
玉藻（フェリス女学院大学）　六号
紀要（藤女子大学）　七号
国文学雑誌（藤女子大学）　八号
国語国文学（福井大学）　十四号
芸林（芸林会）　二十一巻一〜六号
国語国文学会誌（学習院大学）　十三号
学習院女子短期大学紀要　七・八号
国語国文学（岐阜大学）　六号
語学と文学（群馬大学）　十四・十五号
文経論叢（弘前大学）　五巻三号
中世文芸（広島大学）　四十六・四十七・四十八号
広島女子大学紀要　五号
国語国文研究（北海道大学）　四十四・四十五・四十六号
語学文学（北海道教育大学）　八号
茨城キリスト教短期大学紀要　六号
紀要（実践女子大学）　十三号
実践文学　四十・四十一号
国文学論集（上智大学）　四号
ソフィア（上智大学）　十八―四・十九―一・三・四号
解釈（解釈学会）　十六―一・三・四・五・六・九・十七―二号
国語国文薩摩路（鹿児島大学）　十五号
金沢大学法文学部論集文学篇　十七号
金沢大学語学・文学研究　一号
国文学（関西大学）　四十四号
関西大学東西学術研究所紀要　三号
日本文芸研究（関西学院大学）　二十一―三・四号
日本文芸学（関西学院大学）　五号

（次号につづく）